

## 晚唐詩の「夢」

——李商隱と杜牧の側面——

松岡 秀明  
京都大學

無驚託詩遣 驚しみ無く詩に託し遣らんも

吟罷更無驚 吟罷れば更に驚しみ無し

(樂遊)

本論の對象は、晚唐の代表的詩人である李商隱と杜牧であり、その詩の中に表現された「夢」という語である。「夢」という語の現われた詩を二つとりあげてみよう。

春夢 亂不記 春夢 亂れて記せず

春原登已重<sup>(1)</sup> 春原 登ること已に重ぬ

青門弄煙柳 青門 煙を弄ぶ柳

紫閣舞雲松 紫閣(の峰) 雲を舞わす松

拂硯輕氷散 硯を拂えば輕氷散じ

開樽綠酒濃 樽を開けば綠酒濃し

晚唐詩の「夢」(松岡)

これは、李商隱の五言律詩である。同じく「樂遊原」を題とする詩は、五絶と七絶に一首ずつあり、「夕陽無限好」の句を含む五絶は、晚唐の五絶の絶唱である。翻つてこの五律を読むと、特に完成度が高いわけでもない。<sup>(2)</sup>二聯の樂遊原上からの風景も、三聯の表現も、平凡で精彩あるものではない。問題であるのは、一聯と四聯の間にある詩人の心理と、初句冒頭にいきなり表現された「春夢」である。亂れて覺えていないという春の夢は、「春の原にもう何度も登った」という行動に影響を與え、内的な關連性を有しよう。この高所に登り長安を見下ろす事は、五絶「樂遊」の、「晚に向んとして意適わず、車を驅りて古原に登る」に同じく、心中の焦燥感や不満足感に基づくであらう。それがここでは、「亂れてしまった春の夢」に起因しているのではないか。續く三聯の何か書こうとする様子。手紙か

もしれない。そして酒。それは心満たされない詩人の消遣の試みであろう。更に詩。しかし、最も楽しいはずの詩も、吟じ終ればそれ迄で、逆に心中の寂寞感を増幅しよう。詩も何の足しにならないと言う。この四聯を讀む時、李商隱の氣がかりなもの、不満の原因が、初句の「春の夢」にある事が確かに了解され、詩人の心理と共に、讀者の方も、必然的に四聯から一聯へと歸ってゆかざるを得ない。詩人の心の満たされなさは、一に、「亂れてしまった春の夢」から流れ、それをめぐっている。あれは何だったのか、覺め亂れなければよかつたのと思われ、逆に亂れてしまつた故に、一層慕わしく氣がかりな、「見果てぬ夢」だったのでないだろうか。

垂鞭信馬行 鞭を垂れ馬に信せて行く

數里未雞鳴 數里未だ雞鳴ならず

林下帶殘夢 林下 殘夢を帶び

葉飛時忽驚 葉飛んで時に忽ち驚く

霜凝孤鶴迥 霜は凝り孤鶴迥かに

月曉遠山橫 月は曉にして遠山横たわる  
僮僕休辭慮 僮僕 辭し慮るを休めよ

時平路復平 時平らかなれば路復た平らかならん

(早行)

杜牧の、やはり五言律詩である。早朝、詩人は馬に任せ揺られて行く。鞭も垂れたままである。それは、まだ眠りから完全に覺めていない詩人自身の對象化であるが、林・霜・空にかかる月・遠くの山山という風景の中に嵌め込まれ、全體が一つの繪畫のような興趣を持つ。詩人も一つの繪の部分となる。そして、畫面に淡く漂い廣がっているのが、殘夢―くずれし夢、くずれつつある夢―という言葉から廣がる曖昧な印象であり、「夢を帶びる」という表現から出る一つの雰圍氣である。覺醒でもなく、眠りの中でもない。また、夢の中でもなく、完全に夢を抜け出ているでもない。それは、早朝という闇と光、明と暗の不分明な薄明の世界と對應した、輪郭の不明な茫漠とした詩人の意識を思わせる。しかし、何を夢みたのが明確でない。

旅であれば、故郷への夢とも考えうるが、はっきりとはわからない。が、杜牧にとつて、その見果てない夢は、醒めてしまふのが惜しいものなのに違いない。夢を帯びて馬に揺られる詩人には、その夢に對する慕わしさがあろう。あるいは、夢は虚構であり、「殘夢」も表現上の作爲と効果の計算の結果とも考えられる。その場合にも、夢というものに對する慕わしさが、「夢」という言葉の性格に對する敏感さが働いていよう。何れにせよ、「殘夢を帯びる」という表現と馬上の詩人のイメージが、この詩を深める大きな要素となつているのは否めないと思われ<sup>(4)</sup>。

李商隱と杜牧の詩中に現われた「夢」の表現の一例をみたが、兩者とも、夢への親密感や氣がかりさを筆端に登らせ、又、詩の言葉としての「夢」の質感・影響力・イメージの形成力などの事を幾分自覺して使用しているようにもみられる。少なくとも「夢」が一篇の詩で重要な役割を擔つている。又、兩者とも、何を夢みているのか、何の夢だったのかは、甚だ漠然として不可解である。一體何を夢みたのか。たとえ亂れ残れたものとしても。夢の内容や實體、

晚唐詩の「夢」(松岡)

夢をみたという事態とは關係なく、詩的表現の一環としての「夢」という言葉の表現があるだけでも考えられるが、一體、彼らの夢に對する意識や態度はどうなのか。「夢」という語をどんな心理の相の下で、意識を込めて表現しているのか。それは詩の表現としてどんな位置と比重を有するのか。他の詩人と比べての表現の特質は何か。このような疑問を次に、この李商隱と杜牧の詩の「夢」は投げかける。そして、彼らは量的にみても、實に多くの「夢」という語を使用しているのである。

「全唐詩」を底本に、晚唐以前の重要な唐代詩人と、杜牧・李商隱を含めた晚唐詩人の「夢」の語の現われ方を調べたのが左の表である。<sup>(5)</sup>

杜牧・李商隱・溫庭筠という同時代詩人に、共通して、同じような率で現われるのが注意される。白居易の代わりに調べた元稹に多い他は、皆少なく、極端なのは杜甫である。元稹は、一つの詩で何度も使用する事があり、「夢」の語の現われた詩の数は、李商隱と同じになっている。杜牧・李商隱では、一篇の詩では一回だけ使用されるのが原

「夢」という語

詩人	總詩數	「夢」のある詩數	「夢」の語數
杜甫	1455	18	18
李白	1004	68	69
王維	384	7	7
韓愈	402	17	17
元稹	828	72	100
李賀	243	21	22
杜牧	524	62	62
李商隱	600	72	73
溫庭筠	335	40	43
韓偓	340	28	28
韋莊	319	31	31

則としてある。このような事から、やはり、杜牧・李商隱では詩と詩人を考察する際、「夢」という語が一つの鍵となつてこよう。溫庭筠を加えた時、晚唐という一つの時代の考察迄進むことができると思うが、今は、杜牧と李商隱の個別的な考察に止めたいと思う。

検討と考察は、詩の中に現われた「夢」の語を含む表現であり、それが詩の言葉として、どのように表現され役割と機能を有し、詩人の心理が投影されているのかという事である。夢のみられた内容や夢の中ででき事の記述ではない。その詮索はあまり意味がないと思われる。そもそも、夢の内容や夢を見た事態を小説的に纏纏と敘述する事は、

中唐の元稹や白居易に多く見られるが、李商隱と杜牧には、ほとんどないのである。(6) 例えば、「一の夢」「一を夢む」というような題をもつ詩は、李商隱に二例、杜牧に一例あるだけであり、夢の中の事の詳しい敘述は李商隱の一例だけである。(7) 單に表現されないばかりか、何を夢みているのかさえつかめなくなる場合が往往にしてあるのである。先にあげた、李商隱の「春夢」、杜牧の「殘夢」はその一例である。このような事は、夢というものの記述や傳達よりも、彼らが、「夢」という言葉の表現の方により關心があつた事を示唆するが、逆に、その使われ方から、夢というものへの獨自的な態度や意識が現われてくるのである。(8)

二

李商隱の「夢」の表現で特徴ある事は、夢が離れ離れになつている者どうしの交通、交信、遭遇の通路あるいははたなることである。夢は端的に言つて「通ひ路」である。

夢・中來數覺來稀 夢中來たること數しばしば 覺めて來たるこ

と稀まれなり

(訪隠者不遇成二絶の一)

「夢」と「覺」の對比的構造をもつが、それにまつわる感情の表現はなく、現實と夢中の行動が同格となる。「來」が通路をよく示しているが、相手は女性でなく隠者である。このような夢のあり方は俗信仰に基づき、昔から詩の中で表現されるわけだが、李商隱では相對的にその表現が、強度にかつ頻繁に行なわれ、更に主體的・願望的な傾向を有するのである。それは表面的な表現の上で、「夢」が「書」(手紙)としばしば對置されることによくあらわれ、「夢」に伴なう心理の屈折を細かく表現するに至るのである。ま

遠書・歸夢・兩悠悠 遠書 歸夢 兩つながら悠悠

(端居)

晚唐詩の「夢」(松岡)

私書・幽夢・約忘機 私書 幽夢 忘機を約す

(贈從兄闓之)

夢と書は通信性を同じく有する手段である。前者は七絶、後者は七律の一句の中で對を成している。對句になる時は、二句に分かれてこの「書」と「夢」は現われる。<sup>(9)</sup>

魚亂書何託 魚亂るれば書何に託せん

猿哀夢易驚 猿哀しめば夢驚き易し

(思歸)

いわゆる「鯉素」の故事を用い、又南方の風物の猿聲などをとり入れ、自分の思いを達する術のなさをいうが、心理も措辭もまだ平板なようである。

夢到飛魂急 夢到れば魂を飛ばすこと急に  
書成即席遙 書は成れど席に即くこと遙か

(碧瓦)

という表現になると、時間の緊張や空間の廣大さも加わってくる。それは心理の緊張と意思の速さである。前句で交信の喜びが急速にあらわれ、後句で交信の遅さと遙かさと焦燥感が現われるが、二句の間には、心理の飛躍と暗転がある。この心理轉換のスリリングな感じは、右の一聯を更に發展させた、次の、七律の一聯に最もよく表現される。

夢・爲遠別啼難喚 夢に遠別を爲して啼けども喚び難く

書・被催成墨未濃 書は成すを催され墨未だ濃からず

(無題「來是空言」)

夢は思い人との交渉の枠組みとしてあり、悲痛なのは、夢の中でも別れなければならぬ事であり、夢そのものではない。已に夢で會うことや喜びは自明の事として表現化されず、一步進んで夢の中の別離に焦點を與える。現實の別れと更に夢の中の別れという、別れの二重性があり、それが悲しみを倍化するであろう。そして夢の中の心理の動搖と感情の高揚は、覺醒時の傳達手段である後句の「書」

へと急激に轉換され、夢の中で別れは、書による交信へ全面的に依りかかる事に心理をつなげる。どうかして、思う人と夢の中でも一緒に居たいという祈願と、別れてもなお連絡を確保しようという心の焦燥には、心理のダイナミズムがあろう。ここには、「愛」とでもいふべきものにつきがりつく人間の切迫感があると思われる。六朝艶詩の、たとえば「夢啼」を含む表現、

夕泣以非疎 夕泣 以に疎に非ず

夢・啼眞太數 夢啼 眞に太だ數

(徐悱婦 題甘蕉葉示人)

などが、それ自體は悲哀感が濃いのに、平板さを感じさせ迫眞的でないのは、そこに心理の細かい屈折や動きがないからではないか。が、李商隱のこの一聯は、迫眞性をもちつつ、人間の心の断面とその露な姿を感じさせる。

故念飛書及 故念 書を飛ばして及び

新懽借夢過 新懽 夢を借りて過ぐ

(腸)

書長爲報晚 書は長く爲に報ずること晩し

夢好更尋難 夢は好きも更に尋ぬること難し

(曉起)

この二例は對照的である。前者は心理の動性があり明るい。相手との連絡あるいは會遇が成った事であり、喜びがある。後者は心理が靜的で感情が沈んでゐる。連絡が停滯しているからであらう。が、ともに夢の通信性・回路性は書と對になり表現されるのである。「夢を借りて過ぐ」「夢は好けれど」という表現や屈折的感情の表出も、他の詩人に見出しにくいのではないかと思う。そして、一見よくあるかに見える「書」と「夢」の對置的使用は、實は他の詩人に殆んど無いものなのである。たとえ對句でなくとも、一つの詩中で兩者を使用し、それに心理の強い動きを孕ませてゆく事も見出しにくい。あつても平板であり、「書」

晚唐詩の「夢」(松岡)

と「夢」への希求の心理は弱い。この「書」と「夢」の對表的表現は、李商隱に獨特なものといつてよいだらう。<sup>41)</sup>

このような、書と對應した夢から歸納予測できるのは、夢が何らかの現實を打通する爲の手段であり、現狀變革の機能ではないかということである。孤獨に閉ざされた、思ひ人から隔たった詩人自身の祈願の様なものさえ、この夢から感じられるのである。そこには、若くして朋黨の争いの中で自らの位置を失った不遇で孤獨な、失意の詩人李商隱の嘆きと心理の反映を、ひきさかれた者と他者との關係の持續を願う心を読みとる事はできないだろうか。夢によつて會う事、連絡する事の希求性には、狀況回復の願いを讀みとる事もできると思われるのである。夢は何らかの救いであるのかもしれない。

悠揚歸夢唯燈見 悠揚たる歸夢 唯だ燈の見るのみ  
漫落生涯獨酒知 漫落たる生涯 獨り酒の知るのみ

(七月二十九日崇讓宅讌作)

この一聯は自己の不遇と孤獨を言う。「私の夢は燈火が見ているだけ」という擬人法も奇抜であるが、「夢」は yon yang という暢びやかな様を示す双聲により修飾され、

「生涯」は huo(l) ho(k) という不遇の様をあらわす入聲の疊韻により修飾され、互いに對になっている。そして更に詩句全體に溢れる、迫ってくるような寂寥感を念頭に置き、翻つて夢の位置に眼を向けると、この「夢」は暗闇に開かれた一つの日のさす窓のような感じを與えるのである。それは、詩人にとっての現實現在の開かれた窓のようでもあるのだ。閉ざされた状況から抜け出る爲の、あるいはもう一つの可能性への手段であり、通路ではないだろうか。孤獨の中の夢は、のびやかに歸つてゆく。<sup>10)</sup>

かくて夢は目的化する。書と對置されない夢の表現でも、しばしば強い夢への依存の感情を示し、それは深刻度を増すように思われる。そこにはやはり孤獨感があり、夢は何らかの現状打通の手段として願われるのである。

莫學啼成血 學ぶ莫かれ啼いて血を成すを

從教夢寄魂 夢をして魂を寄せしむるに従う

(杏花)

杏の花に觸發されて、自己の失路の感をも寄せたと讀める詩の一聯である。前の句では、血を吐いて迄啼くという杜鵑ほととぎすをひきあいにして、そのような事なんかしないという。逆に不遇なこの身を夢で誰かに通わせようという。あるいは夢の中に入って來いという。相手が誰か全く不明であるが、大きく言えば、その事に、自己を救う道があるというのではないか。夢は願いであり、最後の通路であるようだ。次の詩句にも、それが見られる。

未必斷別淚 未だ必ずしも別涙を斷たず

何曾妨夢魂 何ぞ曾て夢魂を妨げしや

(魏侯第東北樓堂郢叔言別聊用書所見成篇)

人との別れの際の詩の一聯。やはり悲しみの故の涙と關

係するが、先の詩句とは逆に、泣け泣けという。それはこれからも夢の中で會えるからと、心理的に後句に續くであろう。どちらの夢も、未來に關わり、語氣は鋭く、夢みる事への悲愴感さえある。そうせしむるのは悲しい孤獨な現實であり、離別の狀況であろう。そして、かく夢に傾く結果、たとえ明確でなくとも、夢であればいいという。夢みることでは何か不安から解放されるようだ。

遠路應悲春晚晚 遠路 應に悲しむべし春の春晚たるを  
殘宵猶得夢依稀 殘宵 猶お得たり夢の依稀たるを

(春雨)

遠ざかってゆく思いにかかる人。残された詩人は夢をみる。しかしかすかな夢である。が、それでも夢をみたのだと言う。「其の人遠く去れ」ば、離れた者にとって、「惟だ夢中のみ尋ね可き」であり、それ以外の思いの傳達性、思い思われることの關係の證明はないからである。そして、うすぼんやりした夢でも夢みられればよいという言を發す

晚唐詩の「夢」(松岡)

る所に、何か狀況に押し込められた李商隱という詩人の、孤獨なつぶやきと影を感じることができないのではないかと思われる。

更に次の詩には、孤獨に置き去りにされた詩人の夢への依存が、より直截に現われている。

長亭歲盡雪如波 長亭に歲盡き 雪 波の如し  
此去秦關路幾多 此より去れば 秦關 路幾多ぞ  
唯有夢中相近分 唯だ夢中に相近づく分有るのみ  
臥來無睡欲如何 臥來睡り無し 如何んせんと欲す

(過招國李家南園二首の二)

眠る事が夢への條件である。そして夢の中で會うのはもうさだめであるといっているようだ。それは最後に残された通路である。夢は誰にも束縛されない自由な通路である。しかしそうもゆかない。ねむりという條件が無いからである。心が、夢への思いと覺めていざるを得ない意識の間で葛藤し摩擦する。馮浩のように悼亡と見なせば相手は死者

である。<sup>44)</sup>二首連作の第一首に「潘岳無妻客爲愁」とあり、相手は妻であろう。ならば、亡妻との幽明を異にした出會いの回路としての夢である。今は、もうそれに頼らざるを得ない。この地上的世界と死者のそれが夢でつながれる。それは李商隱にとって唯一の最後の手段であり、「分」なのである。夢みる事を願い目的化せざるを得ないのである。更に夢は空間性を廣げ、單なる通路から、夢を一つの別な世界とみ、「この世界」と同格的なものと見るような性格を有するようになる。悲しい現實世界と、それのない夢の中という對比的な發想である。

何處無佳夢 何處に佳夢無からん  
誰人不隱憂 誰が人が隱憂せざらん

(燈)

この一聯は比較的靜穩であり、詩人の思念の一般化された呼びかけがある。已に「夢好」という表現もあり、又「歸夢喜」(歸夢喜ばし) という表現<sup>45)</sup>もあるが、ここで

「夢」は「佳」で直接形容され、反語的に言われて遍在している。對應するのは、全ての人を覆う悲しみや憂いである。それは、夢がある故に、夢に移行することで、悲しみの世界も脱却可能だと敷衍できよう。この基盤の上に苦の中の生は夢へと傾斜してゆく。一つの甘美な世界となり、現實を忘却して迄も、進んでそれを願う傾向を有するようになる。「この世界」よりは、もっとよい「夢の世界」へと。そして、嘗てそういう「夢を願う人」がいたのである。それは文選卷19の宋玉「神女賦」「高唐賦」に伝えられる、戰國時代の楚の襄王である。その人を李商隱が眺める。そして詩の中で襄王に言及する時、自己の影を廣く漂わせる。そこに李商隱の夢がまた、微妙に現われて来る。

襄王と巫山の神女が夢の中で契りを交した故事は、「巫山の夢」・「雲雨の夢」のように使われ、男女の出會いの暗喩となる。こういう表現は多くの詩人の詩に現われ、又李商隱も使用するが、今はこの故事を一篇の詩の題材として作られた詩をとりあげてみる。

漢水方城帶百蠻 漢水 方城 百蠻を帶ぶ

四隣誰道亂周班 四隣誰か道う周班を亂せりと

如何一夢・高唐雨 如何ぞ 一夢 高唐の雨

自此無心入武關 此れ自り心の武關に入る無きは

(岳陽樓)

一、二句は楚國の強大さをいう。……楚の襄王は、父親懷王が秦に捕えられてしまったのに、夢の中で神女に出遇つてから、秦に攻め入り仇討ちする氣を全くなくしてしまつた。それはどうしてか……というのが大意である。この「夢」は女性との愛の世界という意を含みつつ、現實とは異なるもう一つの甘美な世界を意味していよう。襄王は、一度「その世界」を知つた爲に「この世界」で生きる倫理性や行動性を喪失してしまつた。それに、李商隱は「どうして」という判断を下すわけだが、虚辭を頻用し、絶妙に使う中で、詠史詩ではかなりの批判性を盛る李商隱にしては、聊か諷刺性が乏しい。文脈の流れとこの疑問詞や已に見た夢への意識からみると、確かに、「……高唐の夢にふ

晚唐詩の「夢」(松岡)

けた襄王その人の政治的無能を、(悪)としてかならずしも非難はしていないようである。」<sup>66</sup>という口吻も感じられる。そして、「どうしてーか」という言葉は、夢に溺れる襄王に向けられつつ、なお逆に自己自身に向つて訝しがるような感じも與えるのである。「どうして私は夢を……」という様に。この事は次の同じ題材を扱う詩に、より明確な形に現われていると思われる。夢を一つの世界とみる詩人は襄王に觸れつつ次の様にいう。

巫峽迢迢舊楚宮 巫峽迢迢 舊楚宮

至今雲雨暗丹楓 今に至るも 雲雨 丹楓に暗し

微生盡戀人間樂 微生盡く戀う人間の樂しみを

只有襄王憶夢中 只だ襄王の夢中を憶う有り

(過楚宮)

人間のはかない生は、「この世界」の安樂なら何でも喜ぶものなのに(この世は悲しみ許りだが)、ただ一人、強國の權力者襄王は「この世界」の樂しみを棄却しても「夢の世

界」を憶っているという。「只」は文法上「有」にかかるが、意味的には「憶」にも及ぼう。ひたすら夢のみを憶っている。更に「人間」と「夢中」はほぼ對應している。已に莊子の「蝴蝶夢」以來、「この世界」と「夢の世界」の二重構造的把握はあるが、この場合、心の位置方向は「夢」の方に全く向く。「夢」はもう一つの「人間」である。そして、更にこの詩から諷刺や批判を讀みとるのは、前の詩よりもっと容易ではないと思われる。その結果「夢への願望」を持つ人襄王と李商隱は、時代の差や傳説と實在の相違を越えて、第三者には二重寫しのようになる感じを與えるのである。李商隱は襄王に影を投げかけ、逆に自己自身を襄王に見ている感じを與えるのである。已にみた李商隱の夢への態度を想起すると、襄王という一人の夢みる人に自己の分身を見ているのではないかと思われる。「楚宮を過ぎる」という題であれば、長江の巫山近くを自ら旅した時の、その場の思いの形象化といえよう。その時李商隱は、襄王とその傳説をそのまま傳説としての眞なるものとして想起し、襄王と夢の關係に自らの投影を見てし

まったのではないだろうか。

ところが、このような題材を例えば杜甫に見ると、兩詩人の對應と態度の差が明白になってくる。杜甫もやはり巫山の近邊に居た時次のような詩句を形成した。

江山故宅空文藻 江山の故宅 文藻空し

雲雨荒臺豈夢思 雲雨の荒臺 豈に夢思ならんや

(詠懷古跡五首の二)

宋玉の事に觸れつつ、襄王の夢をいうが、その話は夢の中の物語なのだろうか(いや事實としてあったのだ)というのである。「夢思」は否定されている。杜甫は傳説と「夢」の枠組みを解體し、容易に事實に還元してしまうのである。「夢」を排除し、事實と現實に執拗に食いさがる精神と、現實よりも夢そのものを目的化してゆき、容易に「夢」の語を詩にとり入れる精神の有り様は、全く對照的といつてよい。夢に對してストイックであるか、夢を夢みるか。そこに盛唐と晩唐、正統的と異端的なもの微妙な

分岐があるように思われる。

そして襄王の先の二つの「夢」には、單なる「ゆめ」の他、女性との愛の意味が含まれている。夢の表現は、昔から男女の愛の上に往往位置しており、艷詩に現われる。隔てられた思い人が會う場である事が、夢と愛の結びつきの契機となるが、夢の本質的なものと愛のそれが同じようなものであるからでもあろう。李商隱の詩の中心は女性との愛や感情を詠ずるものである。愛の世界への傾きも激しいが、それが失われる時、

嗟余聽鼓應官去 嗟す余が鼓を聽き官に應じて去り

走馬蘭臺類轉蓬 馬を蘭臺に走らせ轉蓬に類るを

(無題「昨夜星辰」尾聯)

という嘆きが生じる。女性との楽しい時と場から日常的世界への歸還をいうのである。この愛の世界を「夢」ととらえたのが、次の排律の末尾であり、二つの表現に發想の類似性がみられる。

晚唐詩の「夢」(松岡)

鏡檻芙蓉入 鏡檻 芙蓉入り

香臺翡翠過 香臺 翡翠過ぐ

撥弦驚火鳳 弦を撥ね 火鳳を驚かせ

交扇拂天鷲 扇を交わし 天鷲を拂う

隱忍陽城笑 隱忍 陽城の笑

喧傳郢市歌 喧傳 郢市の歌

……………

梯穩從攀桂 梯は穩やかにして桂を攀ずるに従え

弓調任射莎 弓は調い莎を射るに任う

豈能拋斷夢 豈に能く斷夢を抛て

聽鼓事朝珂 鼓を聽き朝珂を事とせんや

(鏡檻)

艷麗な典故の重なる詩で、容易には文脈をつかみ難いが、末尾の「夢」を單に「ゆめ」と解することはできない。それは、全體から、女性との歡會の時と場の象徴的なものであり、末二句の意味は明快である。先の詩句との製作順序はどちらが先か分からないが、「夢」ととらえた時、詩人は日

常的生活への歸還を拒んでゐる。先の詩句では、自己を幾分客觀的に戲畫化しながらも、官吏としての日常に歸るのだが、この表現では拒んでゐる。「夢」を捨てられるかと、日常の俗塵的官の生活へ歸れるかと。更に注意してよいのは、「夢」が斷たれた事の嘆き悲しみへと表現は向わず、逆に、「夢」||「戀愛」の世界への強烈な執着となることである。六朝詩のように、それが失われることの嘆きと悲しみは中心としてない。ここには、「夢」と「愛」の世界へのアクティブな指向性と主體性の發露があろう。たとえ失われようと、留戀し、しがみついているのである。このようにして、李商隱では、「夢」と「愛」が結合し、共に目的化されるのである。夢の世界へ、そして愛の世界へと。

以上のような夢への態度の上に、意識的に女性の閨情などを詠ずる詩が作られる時、機知やひねりが加えられてくる。しかも夢は目的性が強く、官能的性格を有するようになる。

紅露花房白蜜脾 紅露の花房 白き蜜脾  
黃蜂紫蝶兩參差 黃蜂紫蝶 兩つながら參差  
春窓一覺風流夢 春窓一たび覺む風流の夢  
却是同袍不得知 却つて是れ同袍にも知るを得ず

(閨情)

「夢」は「風流」なのであり、當然、男女の出会いを意味するが、ここでは、現實よりも「夢」の中の方が彩りがあつてよいという。このような「夢」の表現を可能にしてゐるのは、艷詩の盛行とともに、「夢」を詩人が抵抗感なく詩に混入できる意識の増大と習熟があろう。そして、この様な輕妙さは他の詩人にもままみられる。たとえば、杜牧では、

自是求佳夢 自らはれ佳夢を求む  
何須訝畫眠 何ぞ須いん畫眠を訝るを

(春思五律尾聯)

のようなものもある。機知と諧諷味のあるこの詩句の「夢」にも、艶的な色あいがあり、又、夢みる事が目的化されている。

この艶詩の「夢」の要素を擴大し濃く強くしたのが韓偓である。韓偓は自覺的に艶詩を作り、「香奩集」をまとめたが、そこには次の様な「夢」の表現がある。

夢・狂翻惜夜 夢狂わしく翻かつて夜を惜しむ

粧懶厭凌晨 粧もろは懶もろく凌晨を厭う

(無題第三)

憶眠時 眠る時を憶う

春夢・困騰騰 春夢 騰騰たるに困ず

展轉不能起 展轉 起くる能わず

玉釵垂枕稜 玉釵 枕稜に垂る

(三憶の第一)

これらの「夢」からは、語そのものから發する濃艶な雰

晚唐詩の「夢」(松岡)

圍氣がある。しかも「夢」は主語であり、述語に激しさや動きがある。夢は氣ちがいじみており、勢いづいてはねあがるような性格をもつ。そして、文脈の中でみる時、「夢」は、讀む者を辟易させるエロティシズムを持っているのである。後者の例は、沈約の「六憶」<sup>20</sup>をもとにしたと思われるが、六朝艶詩にこのような「夢」はないといつてよい。李商隱の風流な「夢」は、ここ迄擴大、増幅され、主格を付與されて、生き物のように動き回っているのである。これが、晚唐艶詩の「夢」の行きつく果ての表現ではないかと思われる。

### 三

杜牧の「夢」は、李商隱のように、強度の願望性や意識的な主體的性格を伴わない。夢をめぐる心理の微妙な表現も稀薄である。しかし、夢への慕わしさというのはなお存在するのであり、夢への傾斜的態度も讀みとれ、詩句の中で、「夢」は獨特なあり方をしている。<sup>21</sup>

杜牧は、敘景詩人としての大きな側面をもつが、「夢」

はその紋景や自然の中に入りこむ。その「夢」は、ある特定の自然的環境と密切に關係しあいながら表現されてゆく。それは「水」である。杜牧の紋景の中で、水の占める割合は非常に大きく、様様な水の姿が好んで表現されている。水と杜牧の存在は深く關係あると思われるが、その「水」が、「夢」の傍らを、紋景的詩句の中で流れているのである。それは、泉の音を通してまず表現される。そして、最後には、「夢」を、雨となって包み、川の流れとなつて、載せてしまふであらう。

雲連帳影蘿陰合 雲は帳影に連なり蘿陰合し  
枕遶泉聲客夢涼 枕は泉聲を遶らせ客夢涼し

(題青雲館)

泉から發せられる水音が夢に入ってくる。聽覺は皮膚感覺と融合し轉化し、夢は涼しいのである。杜牧には「寒夢」という熟語もあり、感覺に立脚した夢の把握は、その特質の一つである。次の例から「谷川の流れ」となり、音とし

てやはり夢に關わってくる。

斯人清唱何人和 斯人の清唱 何人か和す  
草徑苔蕪不可尋 草徑 苔蕪 尋ぬ可からず  
一夕小敷山下夢 一夕 小敷山下の夢  
水如環珮月如襟 水は環珮の如く 月は襟の如し

(沈下賢)

杜牧が散文を書くのに、意識し尊敬もした傳奇作家沈亞之を詠ずるが、沈亞之が住んだという山の麓で夢をみるのは杜牧であらう。夢は沈亞之に向い、末句の「環珮」と「襟」は沈亞之の姿の一部を指すと思うが、何を夢みたのかを直接指示する表現は無い。そして、夢をめぐって、ここでも「環珮」の音の様な水の流れがあるのだが、「水」・「月」という紋景のイメージと、「環珮」・「襟」という夢でのイメージが融合し、視覺と聽覺の同時的把握がある。この場合、夢での風景と現實での風景の境界が、除かれているのだといえよう。

恨聲隨夢去 恨聲 夢に隨いて去り

春態逐雲來 春態 雲を逐いて來たる

沈定藍光徹 沈定 藍光徹し

喧盤粉浪開 喧盤 粉浪開く

(丹水 前聯後聯)

北方の、ある川の流れを主題とした詩の中間部であるが、「恨聲」は水音の、「春態」は川の周圍の風物の擬人化されたものである。うらみがましい水音が遠のいてゆく事は、夢の中へ深く入ってゆく事をいうであろう。そして、光と波の微細で感覺的な描寫へと續くのだが、「夢」は敘景の中へ嵌め込まれ、「雲」と對置され、「夢」自體が一つの風物に化しているように思われる。更に、何を夢みるのかは曖昧である。地理などから旅の途中での作と考えられ、故郷への夢とも推測できるが、何も斷定はできない。逆に杜牧にとって、「何を」夢みているのかの指示や、具體的内容は問題ではなく、「夢」という言葉を表現の過程において、單なる言葉として置きたかったのではないかと思わ

晚唐詩の「夢」(松岡)

れる。つまり、詩的表現の必然的な措辭としてあるのではないだろうか。次に例示する詩句においてもこの曖昧さが現われる。

謝公城畔溪驚夢 謝公城畔 溪 夢を驚かせ

蘇小門前柳拂頭 蘇小門前 柳 頭を拂う

(自宣城赴官上京)

宣州より長安へ歸る時の詩であるが、省略した起聯に「蕭灑として江湖十たび秋を過ぐ」とある句から考えると、この一聯は、單なる屬目の景ではなく、「江湖」の地での生活の浮かびくる印象ととれる。それは、謝朓の居た歴史の町宣州での溪畔での「夢」であり、青樓狹斜を連想させる美人のいる家の柳であると。そして、この溪水も聽覺でとらえられ、措辭は平凡であるが、何の夢なのかは直接の明示性がないのである。夢の内容は問題でなく、「水邊での夢」というのが、一つの詩的イメージとなってしまうのである。これは、次の詩に最もよく示されている。

南朝謝朓城 南朝 謝朓の城  
東吳最深處 東吳 最も深き處  
亡國去如鴻 亡國去ること鴻の如く  
遺寺藏煙塢 遺寺 煙塢に藏る  
樓飛九十尺 樓は飛く九十尺  
廊環四百柱 廊は環る四百柱  
高高下下中 高高下下の中  
風繞松桂樹 風は繞る松桂の樹  
青苔照朱閣 青苔 朱閣に照り  
白鳥兩相語 白鳥 兩つながら相語る  
溪聲入僧夢 溪聲 僧の夢に入り  
月色暉粉堵 月色 粉堵に暉く  
閑景無旦夕 閑景 旦夕無く  
馮欄有今古 欄に馮れば今古有り  
留我酒一罇 我に留む酒の一罇  
前山看春雨 前山 春雨を看ん

(題宣州開元寺)

これも宣州での作。この詩の中の「僧夢」は、積み重なる印象的風景イメージの中に嵌めこまれている。そしてまた、何を夢みているのかの傳達性や指示が脱落している。しかし「坊主の夢」というのも、「松桂樹」や「青苔」や「白鳥」「月色」などと對等な自立した風景イメージの一要素を擔っている。つまり、ここでは、詩人にとって「僧夢」も、一つのつくられた繪畫的イメージなのであり、「夢」自體が、印象的繪畫を描く爲に選ばれたよい材料であり、全體を構成する上に必要な點景であるのである。杜牧にあって、何を夢みた、これこれの内容の夢を見たという傳達的表現は、この時、全く問題となっていない。しかし、このようなイメージとしての使用の裏には、杜牧の夢に對する好ましきようなものがうかがえ、更に問題は、「僧の夢」も傍に「水」を伴わなければならないことである。

水のある所は、杜牧にとって閑適の場とみてよいのではないか。水を伴う「景物」と「閑」のあり方は、たとえば次の詩にみられる。

萬家相慶喜秋成 萬家相慶し 秋成を喜ぶ

處處樓臺歌板聲 處處の樓臺 歌板の聲

千歲鶴歸猶有恨 千歲鶴は歸れど猶お恨み有り

一年人住豈無情 一年人住む豈に情無からん

夜涼溪館留僧話 夜涼しく溪館に僧を留めて話し

風定蘇潭看月生 風定まり蘇潭に月の生ずるを見る

景物登臨閑始見 景物登臨して閑に始めて見

願爲閑客此閑行 願わくは閑客と爲りて此に閑行せん

(八月十二日得替後移居雪溪館因題

長句四韻)

末尾に三度反復される「閑」の具體的内容を推測させるのが、先の題壁詩と共通するイメージをもつ、三聯の「溪館」での僧との語らい、「蘇潭」での月の出の賞玩である。重要なのは、やはりこれが水邊でなければならぬことである。谷川とふち。その自然の「景物」の中に、杜牧の願う「閑」の時と場がある。水流がこの心と風景を支えているのである。「溪聲入僧夢、月色暉粉堵」という印象的イ

晚唐詩の「夢」(松岡)

メージも、杜牧にとって好ましい「閑」の世界のものとしてよいと思われる。すると、ここで、水を紐帯として、「景」や「閑」と、已に擧げた水邊での「夢」が統合される。水を軸にして、景へ、閑へという連鎖がみられるのである。そして夢。

さて「僧の夢」は描かれる対象として詩人自身とは表現の上で離れていた。杜牧は、酒を飲んで「春の雨」を眺めようといっていたが、ここで、杜牧の愛好する自然の一つ、「水」の變形としての「雨」が現われる。これも「夢」と結ばれ、聴覚として夢に關わってくる。

憐渠點滴聲 憐む 渠かたが點滴の聲

留得歸鄉夢 歸郷の夢を留め得たるを

(芭蕉 五古 第三・四句)

點滴侵寒夢 點滴 寒夢を侵し

蕭颯著淡愁 蕭颯として淡愁に著く

(夜雨)

雨侵寒牖夢。雨は侵す 寒牖の夢

梅引凍醪傾 梅は引く 凍醪の傾むくるを

(寄内兄和州崔員外十二韻)

最初の例は、芭蕉の葉のたてる雨音である。いずれも寒  
寒としており、音が夢に入ってくる。後の二例は、何を夢  
みているか不明である。いずれも愁いをもつ表現だが、そ  
れは夢自體のもつ愁いや悲しさではなく、夢みざるを得ぬ  
状況と、夢を妨げる外的な自然である。この場合は雨であ  
る。川の水も夢に侵入して目覺めさせ、時には夢とも覺醒  
での現實ともつかぬ微妙なあわいに導いたが、この雨聲も  
夢に完全に浸れず、また完全な覺醒でもない中間の状態に  
導くようである。杜牧も夢へ傾斜している事は、覺めてし  
まうという事でこれ迄よく表現されていると思うが、夢の  
中に完全に入る喜びよりも、夢と覺醒した意識の中間の状  
態を好んでいるようにも思われる。直接「夢」には関わら  
ないが、

半醒半醉遊三日 半醒半醉 遊ぶこと三日

(念昔遊第三の轉句)

というような意識の朦朧とした状態やその時の現實世界の  
輪郭の曖昧さも嗜好にあるように思われる。續く末句の表  
現は、次のようだ。

紅白花開山雨中 紅白 花は開く 山雨の中

一面の全ての景をぼんやりさせる雨の中に浮かびあがる  
のは花だが、酔った意識がとらえるのは、まず原色の赤と  
白であろう。全ては雨でけむる中に色彩のみがとらえられ  
る。この表現は、杜牧の意識と感覺の人工的麻痺と鈍磨を  
反映している筈であり、そこで俗塵に疲れた自己を解體し  
樂にしているのである。

雨は音として夢に侵入するだけでなく、逆に夢を育てる  
媒體ともなる。杜牧の詩では、雨が大きな水の流れと結び  
つく時、それが現われる。已に見た聽覺に關わる谿水では

なく、船を航行させる様な大きな川の流れてある。雨とこれが組み合わさり、「水」は量的に擴大され「夢」が表現される。

江雨春波闊 江雨 春波 闊く  
園林客夢・催 園林 客夢 催す

(送張判官歸兼謁鄂州大夫)

ジャン・ジャック・ルソーは、「孤獨な散步者の夢想」で、湖の「波の響と揺れ動く水面」によって「甘美な夢想」にひきこまれた経験を美しく語っているが、この詩句の川の廣びろとした水面や雨も、夢と關わって、それを育くんであるようである。

亂煙迷野岸 亂煙 野岸に迷い  
獨鳥出中流 獨鳥 中流に出づ  
蓬雨延鄉夢 蓬雨 鄉夢を延まぎ  
江風阻暮秋 江風 暮秋に阻む

晚唐詩の「夢」(松岡)

(晚泊 前聯後聯)

船旅の途中の渡頭の風景の中で夢がみられる。よもぎに降る雨も夢を招く。雨・江、省略した所での帆や橈の船のイメージの連關は、より擴大している。そして恐らく「夢」は船の中、水の上にあるであろう。

織篷眠舴艋 篷を織り舴艋に眠れば  
驚夢起鴛鴦 夢を驚かせて鴛鴦は起つ

(春日言懷寄虢州李常侍十韻)

この詩句で「舴艋」(小舟)の中の眠りが直接表現され、夢も眠りに連なる。そして夢も眠りも水の上にある。杜牧には「ねむり」をいう印象的な詩句が多いが、荒井健氏も指摘されるように、「ねむり」も雨と密接に關係しあっているのである。

聲眠篷底客 聲は眠らず篷底の客

寒濕釣來簑 寒は濕す釣來の簑

(江上雨寄崔嵬)

とある眠らず聲の主體は、この詩の省略した第一聯の「春半の平江の雨」なのである。眠る主體は水の上であり、雨がねむりを育くむ。すると、杜牧にあつては、水や雨に關わる「眠」と「夢」とは、表現上同質的なものと言つてよいのではないか。實際、杜牧の「睡」や「眠」を「夢」と置きかえても、何ら不自然な感じは文脈上意味上なく、多く相互置換が可能であり、「夢」の背後には當然「眠」が、「眠」には「夢」が隠れているといつてよいだろう。そして時として、同時に表現されてくるのである。次の例は對になつてゐる。

青梅雨中熟 青梅 雨中に熟し

橋倚酒旗邊 橋は倚る酒旗の邊

故國殘春夢 故國 殘春の夢

孤舟一榻眠 孤舟 一榻眠る

搖搖遠堤柳 搖搖たる遠堤の柳

暗暗十程煙 暗暗たる十程の煙

南奏鐘陵道 南に奏す鐘陵の道

無因似昔年 昔年に似るに因し無し

(罷鐘陵幕吏十三年……感舊爲詩)

この詩にも「眠」と「夢」が現われ、對置されている。

そして表現の連關がある程度まとめられている。雨・舟・江邊の風景・水の流れなど。晩春という時と好ましい風景は眠りを誘う。特に雨が詩人を覆い、水のゆったりした流れが詩人を載せるであろう。水にくるまれた詩人に、夢は自ら浮かんでくるであろう。この甘くかすかに哀愁を帯びた夢を詩人は十全に肯定しているようにも思われる。しかし現實の視界はたゆたいたまた暗いのである。それは詩人の心の不安定とうす暗さでもある。更に詩は、追憶と時の推移感の苦みへと續くが、「夢」と水の關わる敘景の前半四句と暗く揺れる視界と回想の後半四句は、對照的となつてゐる。好ましい景と夢、現實の自己と憂わしい生という對

比的な感情をみることができるよう思われるのである。

このようにして、泉から流れ出た水は、遂に川の大きな水流となる。「夢」はいつもその傍らにあり、時には音として侵入されたり、あるいは雨にくるまれ、水の流れの上に乗かぶ。この過程に、「景」―「閑」―「眠」―「夢」などの要素が連鎖してゆく。俗塵としての現実から、好ましい自然や風景の中へ、閑適の時と場へ、現実の忘却へ、心の安逸へ、ねむりへ、夢へという一連の後退のプロセスがあり、それは水というものに貫かれている。他人から離れ、自己自身に閉ざされ、自己意識さえも忘れてゆく。あるいは、傷つけられた自己をいたわり、疲れた意識を麻痺解體させてゆく。そして闇と無意識の場へと後退し、閉じてゆくのである。雨や水は、これを助ける觸媒として機能し、詩人を包み込み、ベールとなり外界と遮断し、抱きかかえ、揺るのである。詩人は、その時、ゆっくり眠りの中へ入ってゆき、そこに自ら「夢」が浮かんでくるのである。それは、船の中、水の上で雨に包まれる「夢」の表現がよく示す所であるが、この「水」という物質と「夢」と

晩唐詩の「夢」(松岡)

の精神的關係は、根本的な地點で何を意味するのであろうか。この解明は本稿のなし得る所ではないが、「憂いもなく穏やかな長い時間、そして孤舟の底に寝そべてわれわれが空を視つめている長い時間のあいだ、どのような追憶に向かうのだろうか?……中略……水はわれわれを運ぶ。水はわれわれを揺する。水はわれわれを寝かしつける。水はわれわれに母を返してくれる。」というG・バンシュールの指摘は魅力的である。<sup>24</sup> くりかえされる水に關わる「夢」(その背後にあるねむり)の意味するものは、最後に、恐らく母なるもの、母性に還行してゆくものではないだろうか。この時、「孤舟」は「再び獲得された搖籃」となるであろう。そして、現実の「俗塵」―「景」―「閑」―「眠」・「夢」―「母」という一連の流れを閉じることができるとは思われないかと思われる。

杜牧にとって、夢は苦い生の中の一つの救いであり、慰めであろう。杜牧も、眠りへ夢へと傾いてゆく。それは、李商隱のように、悲痛感や願望性や強い主體性という性格はほとんどなく、屈折する心理もない。自己にとって慕わ

しい自然の中に居る時、ゆっくり夢の方へ流れこんでいてしまふようだ。表現された「夢」からその様な詩人の夢が歸納されるが、時として何を夢みているか不明であり、かえって周囲の風物と同格となつてしまふという性格もあつた。しかし、常に「水」が「夢」につきまとうのである。このような、自然の具體的なものと「夢」の関係は、他の詩人には見られない。もとより、外界と切斷された、隱道のような李商隱の「夢」にはなく、杜牧獨特のあり方といつてよい。

また李商隱と較べた時の大きな相違として、杜牧の「夢」が過去と關わる事があげられる。唐詩によくみられる「人生は夢」という發想と共に、具體的數詞による一定の過去を夢ととらえるのである。

四朝三十載 四朝 三十載  
似夢復疑非 夢の似く復た非かと疑う

(杜秋娘詩 五言古詩)

有爲轉變の女性の一生を小説的に敘する詩の二句である。過去の時間を夢のようだという。

的的三年夢 的的たり三年の夢

迢迢一綫緬 迢迢たり一綫の緬

(襄陽雪夜感懷)

十年一夢 歸人世 十年一夢 人の世に歸る

(出宮人二首の一)

十年一覺揚州夢 十年一たび覺む揚州の夢

(遺懷)

後の二例の場合は、特に「夢」は華やかなりし時というニュアンスを持つ。最後の有名な一句は若い青春の時そのものを言う。それらは失われとりもどす事のできない時である。夢のように魅力あり、はかなく過ぎた時間である。

直接數値は伴わないが、

舊事參差夢・舊事 參差たる夢

(別沈處士)

という表現でも過去は一つの夢である。かつての事どもは、  
くいちがった夢なのだと、悲哀感をこめていっている。

このように一定の過去を「夢」と規定してゆく事は、李  
商隱には見られず、人生は夢という表現は他の詩人にもみ  
られるが、數値による過去の時間と「夢」の結合は、他の  
詩人にも見出し難い。李商隱には全般的に見て、自身の過  
去への追懐的態度というのが、全く稀薄であり、生の無常  
感、時の推移感などの感情もあまり見られない。杜牧には、  
こういう要素が詩の大きな主調としてあり、「夢」も、過  
去を向いた意識や態度の方向に、位置づけられていると思  
われる。

しかし杜牧の「夢」も個人の生や過去に向けられたもの  
である。これが晩唐の最後を飾る韋莊に至ると、變質して  
いるのに気づく。人生を思えば

浮生都是夢・(對酒賦友人)

友を思えば

三楚故人皆是夢・(鄜州留別張員外)

昔遊を思えば

今日亂離俱是夢・(惜昔)

南朝の歴史に觸れては

有國有家皆是夢・(上元縣)

六朝如夢鳥空啼・(臺城)

魚龍爵馬皆如夢・(雜感)

夢は個人から人々、社會、歴史へ擴大し比喩的に何でも覆  
う。「都て」「俱に」「皆」という言葉に、強く何もかも

夢なのだという語氣が感じられる。もとより、ここには唐末の亂離と亡國の經驗から生じる認識があるろう。しかし、たとえば、溫庭筠が北齊の亡國を歌う時の表現、

萬古春歸夢不歸 萬古春は歸れど夢は歸らず

(達摩支曲)

のように、失われた過去や歴史を美的に憧憬、哀惜し懐かしむという感情は殆んどない。韋莊にはただ力弱いつぶやきの如きものがあるだけなのである。韋莊にとって、地上の世界はもう終っているのだ。夢が個人の生の中で比喩的に表現される時、そこに個人の生の停滯と行きづまりがあるが、個人性を破り、溢れて、夢が、何もかも比喩的に覆う時、逆に覆われた世界は終末を迎えているのである。それは唐という一つの世界と唐詩の「夢」の同時的な終末を意味していると思われる。

#### 四

李商隱と杜牧の詩の「夢」という語の表現をたどる事によって、夢と詩人との獨特な關係が現われて來た。それは序章にあげた唐代の大詩人や、それ以前の六朝の詩人達からは、見出すのが難しい特質といってよいと思う。表現は、單に夢を見たという事態の傳達や夢の中のでき事の記述でもない。あるいは、夢というものを、小説的敘述の枠組みとして用いるのでもない。彼らにとって問題なのは、詩における「夢」という詩的言語そのものではなかったかと思われる。「夢」という語は單に量的に多いだけでなく、質的にも魅力ある詩的表現を達成している。「夢」という言葉そのものの表現に賭けている一斑は、本論の中の引用にある程度示されていると思われる。そして、その一回性的表現に、夢というものに對する詩人の心理や意識が注入され、結果として、夢に對する詩人の態度や深い内面的つながりが導かれてくるのである。それは、夢を夢みるような、正に「夢は第二の生である」というべきような性

格を持っている。

このような夢への指向性は、同時代詩人温庭筠にも、深く内面に根ざしながらあるのである。更に、宗教的基盤はありながらも、あまりにも夢を好むあまり、夢が「實在の基礎」となったような詩僧貫休なども晩唐に居る事を考えると、晩唐という時代の一つの時代精神のようなもの迄推察しうるのであるが、最後に、あえて圖式的に、李商隱と杜牧をまとめれば次のようになる。李商隱の夢は積極的、能動的なものであり、杜牧の夢は消極的、受動的なものとしてよいであろう。李商隱の夢がたえず未來性を指向し、孕み、背後に感じさせる現實的なものを超えんとするものであるのに對し、杜牧のそれは、現實的な地點からの移行、後退というような性格を持ち、過去指向的である。可能的未來へ向うものであるか、不可能的現在から流れ、非可逆的過去へ向うものであるか。これがすなわち、李商隱と杜牧という詩人とその詩のあり方を、側面から、深く示唆しているのではないかと思われるのである。

晩唐詩の「夢」(松岡)

○ テキストは、序章の量的調査以外、全て四部叢刊本を用いた。四例、字形の相似などによる誤りと思われるものがあり、他の無注本、有注本に據って改めたが、一一注釋に記しておいた。

(1) 「登」は四部叢刊の明嘉靖本では「登」(祭禮の器)となっている。錢謙益寫校本や朱鶴齡、馮浩などの注釋本により「登」をとる。字形の相似による誤りであろう。

(2) 四部叢刊本では、五絶は「樂遊」七絶は「樂遊原」となっている。

(3) 屈復「起甚佳、下皆套話」玉谿生詩意卷3。馮浩「與下向晚俳諧、皆似少作」玉谿生詩箋注卷5。

(4) # 二十日餘りの月かすかに見えて、山の根ぎはいとくらぎに、馬上にむちをたれて、數里いまだ鷄鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至りてたちまち驚く。馬に寝て殘夢月遠しちやのけぶり# これは「野ざらし紀行」の芭蕉である。

(5) 底本は「全唐詩」(中文出版社影印)の全唐詩小傳を付する部分。句は除外する。固有名詞も除く。晩唐詩人以外で、索引のある詩人は、それを用い、一一全唐詩で確認するという方法をとった。索引の數そのままではない。全唐詩小傳を付する部分にはない詩、詞、連句、「全唐詩」では他人の作として除いた詩が、索引の底本に入っている場合があるからである。總詩數は、京大人文研編「唐代の詩人」に據った。温庭筠は同時代詩人として、韓偓と韋莊は、本論中で言及し

た事によりあげておく。二章以下の立論は、ここにあげた全ての詩人の表現を一應踏まえてのものである。

(6) 明の張之象他編「唐詩類苑」巻87人部夢には、夢をテーマとしあるいは題とする詩が69首集められている。この中で白居易と元稹が最も多く、白居易19首、元稹12首となっており、白居易には一百韻の詩まである。

(7) 李商隱では、「七月二十八日夜與王鄭二秀才聽雨後夢作」七言古詩と「夢令狐學士」七絶、杜牧では「秋夢」五律。詳しく内容を語るのは李商隱の七古だけである。

(8) 晚唐艷詩との関係で、「玉臺新詠」とその主要な主として梁代の詩人を調べたのが次表である。参考までにあげておく。「玉臺新詠」は索引に、各詩人は丁福保の「全漢三國晉南北朝詩」に據った。方法は唐詩の場合と同じ。

	總詩數	「夢」の語數	「夢」のある詩數
簡文帝	287	6	6
庾肩吾	85	1	1
徐摛	5	0	0
庾信	256	2	2
徐陵	40	2	2
沈約	192	5	5
范雲	41	1	1
任昉	23	0	0
江淹	103	3	2
(玉臺新詠)			
宋刻本	662	24	19
吳兆宜注本	841	37	30

(9) 以後特に注記しない二句の引用は、全て近體詩における對句の一聯である。

(10) 「玉臺新詠」巻10。引用は吳兆宜箋注本に據る。

(11) 元稹に「音徽」、杜牧に「家書」との對がみられる。それれ一例。李商隱では「音信」「音訊」などとは對せず、「書」とのみ對句を形成する。

(12) 張采田「玉谿生年譜會箋」によれば、この七律は會昌元年、三十歳の時のもの。「薄落生涯」には、牛李の黨争の中で、王茂元の娘を妻とした事による非難と立場の喪失などの事情も背後にあるかもしれない。「舊唐書」巻一九〇、「新唐書」巻二〇三に、この間の事が書かれている。

(13) 馮浩「玉谿生詩箋注」巻5

(14) 馮浩「玉谿生詩箋注」巻4

(15) 「故山歸夢喜、先入讀書堂」(歸墅五律尾聯)

(16) 高橋和巳「詩人の運命」第二章。なおこのテーマを李商隱が他の詩人とは同じ様に扱っていない事は、同書に検討と考察が見える。

(17) この二つの詩では、注釋で假託や寓意が問題にされるが、それがあるとしても、李商隱がこの故事をどう扱い詩の骨格としているかに視點を置けば問題はないと思われる。

(18) 「余」は四部叢刊本では「餘」である。「餘」に「われ」の意味はないよう、諸有注本、無注本に據って「余」とする。

- (19) 姚培謙の解を記す。「首四句寫其居止、隱忍四句寫其色藝、五里四句寫其隔絕、王集四句寫其房櫳、騎檐四句寫其出遊、橋迴四句於所值之地而一見流連、想像四句於既歸之後而不勝神往、末四句以盼望無聊之意結」(李義山詩箋註卷6)
- (20) 玉臺新詠卷5、今四首しか傳わらない。
- (21) 杜牧の検討は四部叢刊本の「本集」「外集」「別集」の範圍内であり、馮集梧「樊川詩集」の「樊川詩補遺」や「樊川詩集注」(中華書局上海編輯所一九六二年)の「遺收詩補録」は除く。用例もできるだけ本集に據った。
- (22) 沈亞之の夢とも考えられるが、繆鉞「杜牧詩選」などを參考にして、杜牧の夢とした。
- (23) 「聲破寒窓夢、根穿綠繡紋」(題劉秀才新竹五律)の音は、竹の葉がたてる。
- (24) J・J・ルソー「孤獨な散歩者の夢想」第5の散歩(今野一雄譯)
- (25) この「蓬」はもともと「蓬」(とま)ではないか。が、「蓬」に作るものが見えず、今、四部叢刊本に従う。
- (26) 四部叢刊の明翻宋刊本では「蓬」は「蓬」(よもぎ)である。これでは兩詩句とも意味が通じ難い。同音、字形の相似による誤りと思われる。今、馮集梧に従い「蓬」をとる。
- (27) 荒井健教授「杜牧」中國詩文選18
- (28) 「搖搖」のもう一つの使用例。「君意如鴻高的的、我心縣施正搖搖」(宣州送裴坦判官往舒州時牧欲赴官歸京七律)
- (29) ガストン・パンシュール「水と夢」小濱俊郎他譯第五章
- (30) 杜牧の散文の夢は詩の夢と全く異なる。「唐故宣州觀察使御史大夫章公墓誌銘并序」(樊川文集卷8)「自撰墓銘」(同卷10)などに現れる夢は、超自然的神秘性を持ち預言的性格をもつ。清水茂教授「杜牧と傳奇」(中國文學報第一冊)は、杜牧の傳奇小説的なものへの關心とその散文への影響を説くが、夢もその影響の中であり、傳奇小説的要素の吸収があるのではないか。散文と詩では夢の使いわけがあるようであるが、その性格の乖離はなお検討を要する。詩の中では、杜牧に「夢卜」李商隱に「占夢」などの語がみえるが、夢の預兆性や神秘性はそれぞれ一、二例の表現しかなさくない。
- (31) この詩は、「唐人六集」の「王建詩」にも、みえる。全唐詩では王建に載せない事、杜牧の本集にある事、王建は全唐詩で七例の「夢」の語の使用があるが、この例のような表現がない事、その他により、杜牧の詩として考えた。
- (32) 例えば、元稹の「江陵三夢」の第一首には八例の「夢」の語があるが、山本和義氏はこの詩について、「この一首にうたい込まれた夢は、きわめて効果的である。フィクションを巧みにすることによって、詩は、生きている。」「この詩にみられる夢は、枠があり、その枠の中で、現實の世界を、再構成している。」と説明される。(元稹の豔詩及び悼亡詩について)(中國文學報第九冊)
- (33) 小林太市郎「禪月大師の生涯と藝術」第十章による。